

アメリカの日本文学研究

アメリカ日本文学会の活動をめぐって

関根 英二

ここ10年ほど日本文学の研究者が集まる会議を開き、それを翌年論集として発行する活動を続けてきました。わたしが勤めているパデュー大はインディアナ州というところにあります。アメリカのなかでは中西部といわれる地域です。1992年に小規模な研究会でも、ということでこの地域のひとたちに呼び掛けて始めたのですが、好評で、参加者が毎年増え、1995年に中西部の日本文学会という学会形式になりました。当時すでに参加者は全米規模になっていて、1999年に名称をかえて、現在の全米学会になりました。いままでの研究活動の様子を、なるべく例を多くあげながらお話してみたいと思います。

まず、会議の特徴のひとつとして日本からゲストを招いて講演していただくという形が定着しています。今までお招きしたゲストは柄谷行人、小森陽一、水田宗子、上野千鶴子、川本皓嗣、ドナルド・リチーの諸先生をはじめ、かなりの人数にのぼります。お茶大の市古先生にも来ていただいています。実作者では水村美苗、多和田葉子、伊藤比呂美、高橋睦男、キョーコ・モリなどのみなさんに来ていただいています。三日間ひとつの場所に固まって行動しますので、アメリカの研究者たちには刺激的な交流の機会になってきたと思っています。

この学会は現在会員数が200人ちょっとで、これはここ二、三年、微増してはいますが、大体固定してきました。そのうち25人あまりがアメリカ、カナダ以外からの会員になっています。日本から10数人、その他、アジア、オーストラリア、ヨーロッパ各国から数人ずつといった形です。^(註1)

会員の構成について申し上げますと、まず、研究分野としては、近現代の研究者が多いと言えます。数をきちんと数えてはみませんでしたか、6割以上の数になるのではないかと思います。古典の専門家は、とくに中世が手薄だという印象です。江戸の研究者も少ないのですが、最近若干増えてきていると思います。また、全体を通じてものがたりや小説をおもに研究している人が多く、うたとか劇の研究者は不足していると思います。性別で言いますと、女性の研究者が多いのも特徴だと思います。これもきちんと数えてはいませんが、半数から、もうすこし多い比率を女性が占めていると思われます。

つぎに、研究のトピックですが、これは、かなり多彩だと言えそうです。例えば、『源氏物語』、『枕草子』、『更級日記』、『平家物語』、芭蕉、西鶴とか、近代では漱石、谷崎、川端、三島、大江といった代表的な作家のものも扱われていますが、あまり知られていなかったものを取り上げるケースの方がむしろ多い。『和漢朗詠集』の異本の書体の比較などを含めて、平安文学における和と漢の対立と調和の問題を論じたもの。和漢の調整というトピックでは、『枕草子』と『紫式部日記』における漢詩文の取り込み方を論じたものもあります。中世の説教歌に焦点をあて、このカテゴリーが勅撰集の編集上の思想や審美的な経験の質にどう影響するのかを問うもの。能の『女郎花』の自殺する女というトピックを取り上げ、それが、結局、シテである夫の自己救済をドラマ化して終わるという展開に中世のジェンダーの政治を読むもの。江戸の朱楽管江や大隈言道の歌論の研究。いくつかの江戸戯作の研究、特に、黄表紙や落語のナンセンスなことばの問題に焦点をあてた、いくつかの論文も目につきます。近現代で言いますと、宇野浩二の、イメージを強調するより音の要素を猥雑に強調したユーモアに、その戯作的といわれる語りの特徴を呼んだもの。江戸川乱歩の『孤島の悪魔』を、時代の植民地主義の展開と変態性欲論などを通じてひろがったホモフォビアの浸透とが不可分にかち合ったテキストとして読み、グロテスクなものへの恐怖と熱中がいりまじった時代の不安定な感情の反映を読み込んだもの。高橋睦男の長詩「頌」にパターユ的なエロティシズムの神学の展開を読むもの。安西冬衛のアイロニカルなモダニズム詩に満州育ちの日本人としての屈折を読み、それが、植民地主義をめぐる近代日本人の屈折に重なる点を論じたもの。また、沖縄や在日の作家が文壇ジャーナリズムにブーム的に受け入れられるようになった現在の現象を論じたものなどもあります。

上のものは主として個々の作品ないし作品群に焦点をあてたものですが、文学トピックの伝承に関わる問題をあつかったものもあります。和歌から俳諧への展開をととして、いわゆる「本意」と呼ばれるものがどう変化したのかを

論じたもの。また、特に、女性性の伝統とその変形、発展を論じたものがいくつかあり、鬼子母とか山姥の伝統を論じたもの、また、小野小町伝説の展開を読むものとして、中世の『小町草子』をあつかったものやマイカルス・アダチ先生の円地文子『小町変相』の分析などもあります。さらに、絵テキストをからめた分析では、春信の絵暦の見立ての分析や小倉百人一首が江戸の絵を含むテキストでどう変形されたかを論じたものもあります。また、映画やまんがをあつかったものも少数出てきています。

全体として、トピックの選択がかなり多様化していると言えると思います。こうした傾向には、アメリカの日本文学研究が新しい段階に入ってきたことを示しているという一面があります。日本研究は第二次大戦以後の分野で、最初の段階は代表作の翻訳、紹介が中心だったわけですが、日本文学の理解や関心の裾野がひろがってきているということです。もう一つの面は、現在、世界規模でひろがっている思想の潮流を反映している面で、キャンノン批判、ポストコロニアリズム、多文化主義、クレオール主義といった関心に連動している面です。

さて、以下では、研究の方法について、さらにいくつか例をあげて御紹介したいと思います。これはテーマの問題と交差しているので重ね合わせながらお話しします。われわれの会は毎年、その年の会議の主催者がテーマを設定して、それにそった発表を集めるようにしています。^(註2) 1995年の第4回の会議は「リヴィジョニズムと日本文学研究」というテーマでしたが、主催者は、新しい読みと古い読みの対立をめぐる問題に焦点をあてました。理論を踏まえた読み方をする研究者が増えていること、理論の知識が無いとわかりにくい議論が多いこと、いわゆる古い読みの研究者には新しい理論の思想的な立場に違和感があることなどが話題になりましたが、問題が大きいこともあり、十分議論が尽くされたわけではありません。新しい読みは理論を踏まえた読み方ですが、特定の理論をめぐる議論を大きく展開した論文はそれほど多くはありません。むしろ、理論の思想の影響力が大きいと思います。キャンノン批判とか、男中心のジェンダー政治への批判という立場の論文は理論的な議論を含まない場合でもひろく前提にされていますが、そういう形で、影響が現れていると思われるのです。

この点をもうすこし踏み込んで論じますと、さきほど触れた第4回の会議の時に、日本文学をそれ自体の原理に従って読むためにという主旨の発表がありました。タフツ大のチャールズ・イノウエさんがその論者ですが、かれは従来の日本の近代の小説の読まれ方を検討し、従来の研究が西洋のノヴェルをものさしにして、日本の小説はノヴェルとして不十分な達成だという評価の仕方をしていることを指摘しました。そういう読み方への違和感にこだわって、イノウエさんは日本の小説を日本の文芸の伝統とつながる独自の原理をもつ達成として読むために自前の理論モデルを提出してみせました。このひとつがこだわった違和感には、ポスト構造主義以後、直接にはオリエンタリズム批判以後、の感受性がよく示されていると思います。西洋の価値をあらかじめ普遍のモデルとは前提できないという感じ方、日本の文学も西洋の文学も、それぞれの歴史と特有の地域性のなかで展開してきた達成として相対化しつつ、近代における両者の影響はローカルな特性の上に複雑に重ねられると考えることなどがポイントとして含まれるでしょう。こうした日本文学を読む基本の姿勢に関して、上の論者に共感するひとは多いだろうという意味で、われわれの学会の主流は、新しい読みの方向を向いていると言えると思うのです。

ところで、実際に目に見える形で言いますと、研究の方法という点で、ちがいがめだつのは作品論（作品の内在的な読み）対作品の評価論（作品の外在的な読み）というアプローチのちがいではないかと思われます。このふたつの読みの対照にもうすこし具体的に触れてみます。いまのところ、作品論の方が量的にはまだずっと多いと思います。一般的に言って、これは作品の個性のニュアンスを突き詰める上で依然として有効な方法になっています。ただ、作品論のなかでも、アプローチの仕方にはいろいろなものがあります。『枕草子』の「えせもの」ということばに託されている意味を、構造意味論に準ずるやり方で細かく読んだ論文がありますが、これはスケールは小さいですが、手堅い議論になっています。一方、アダチ先生のもののように、小町伝説の伝承を細かく文献にあたって調べ込んだ上で、円地の作品がこの伝承をどう変形、発展させたのかを読み取っていく、スケールの大きい作品論もあります。作品論には理論を使った読みも多くありますが、理論の応用の仕方にはかなりニュアンスのちがいが出ています。その点を以下でしばらく検討してみます。

理論的な読み方がはっきりしている一例として、まず、ラトガー大のニーナ・コルニエッツさんの泉鏡花論を取り上げてみます。鏡花は反近代的な伝統美の表現者と言われていますが、そういう読み方を問いなおして、鏡花の描く伝統のイメージが時代の近代主義的な価値観を実は表現しているのだという論点が展開されています。これは別の会

議ですが、久保田淳先生が「泉鏡花の作品の日本の特性について」という基調講演をされていて、そこでは鏡花がいかに豊かに伝統を受け継いでいたかが実証的に解説されています。それとは、対照的に、コルニェッツさんの論文では、鏡花に特徴的な女性イメージ——恐ろしいが誘惑的で、ファーム・ファタール的なイメージのことでありますが——の近代性が強調されて、論じられているのです。

論者は、鏡花が偏愛する魔女的な女性が、エロティックな母というイメージで描かれている点に注目します。これは鏡花の時代の近代国家主義体制におけるジェンダーの政治を反映しているという読みが展開されます。江戸時代まで公の場そのものから排除されてきた女性が、明治のナショナリズムが強化されるなかで、はじめて公のアイデンティティを与えられた。男と女が、働く男対いえの女という形で、役割を棲みわけながら共同で国家のために働くという価値観が現れたからです。その結果、女性は、女＝母、母性性というアイデンティティに強くしばられることになります。この体制は、男色文化をもっていた江戸とちがいで、異性愛強制主義的な近代のセクシュアリティの体制でもあって、男は私の領域で女との合一を求めるわけですが、この探究の限界領域では、相手のイメージに分裂が生じる。母なるものとして相手を求める面と、母性からはみだした他者としての女、気味の悪いエロスであるような女（クリステヴァ的な意味で、オブジェクトと呼ばれるタイプの女）にひかれていくというふたつの面の分裂です。このせめぎあいが、收拾のつかないまま、めまいのような感覚へと盛り上がる経験が、近代の男にとって、最も昂揚した形での、女性との合一の経験になる。恐ろしくて同時に恍惚となるような経験、ラカン的な意味でのジュイサンスの経験が、こうして生きられることになると論者は主張し、「高野聖」などを例にあげています。聖が、山のなかの魔女に抱き締められて意識を失う経験は、まさに上の意味でのジュイサンスの経験だとされるわけです。これは遊女対地女という形で母性とエロスを原則上くっきり分離していた江戸時代のエロスの冒険とは異質な経験、近代の主体に特有の経験を表現していると結論されるのです。

この論文は理論的な議論を前面に押し出していますから、その思想の特徴がよくわかると思われます。新しい理論と言われるものは、ラカンのようなポスト構造主義といわれる理論から現在のカルチュラル・スタディーズにいたるまで、基本的には共通の思想の立場を取っています。西洋近代と言われる制度を構成する原理を理解し、さまざまな角度からこの制度を批判的に問いなおそうという立場の共通性ということです。方法的にも、共通に、デイスコース分析という方法を取っています。その場合、一番のポイントになるのは、作品なら作品を閉じた、独立のデータとして読まずに、それを書かれた時代のコンテクストとの関連として読むという姿勢です。コンテクストの焦点になるのは、いわゆるマスター・ナラティブといわれるものです。つまり、社会が集合無意識的に支持している価値観、価値の制度といったものです。取り上げた作品がこのコンテクストに対して、それを支え、強化するように働くのか、逆にそれを批判的にゆすぶるように働くのか、といった観点が読み方の中心の関心になります。コルニェッツさんは、近代の男中心の異性愛主義という制度的なコンテクストに対し、鏡花の女性の描き方が、制度を逸脱するというより、むしろ制度の内側であって、それを強化する性質のものだと判断しているわけです。

上の論文と対になる例として、津島祐子の少女性を論じた、ウェレズリー大のイヴ・ジーマーマンさんの論文にも触れてみます。主として、「草叢」という作品を中心に論じていますが、この話の女性の語り手は、私生児をみごもって実家に帰ってきて、そこで、その母と姉との、こども時代から続く齟齬の気分をあらためて噛み締めています。母と姉は語り手の分別のなさ、だらしなさにいつも憤っていて、逆に語り手は母や姉が分別という名で支持している母という制度に反撥する気分を自分のなかで咀嚼し続けます。津島にはシングル・マザーを主人公にした作品が多く、その評価も母というアイデンティティを前提にした議論が多いことを指摘した上で、ジーマーマンさんは、津島の書くことの原動力が母と言う制度の外部にある要素、自分の中の少女へのこだわりではないのかという観点を提出し、そういう少女のイメージを「草叢」という作品に読み込んでいくのです。この話には、はつかねずみの子を溺愛していたが、子ねずみに毛がはえはじめると、庭に穴を掘って生き埋めにしていたという、語り手の少女時代のエピソードがあり、一方、話しの最後では、現在の自分に、母が唐突に近付いてきて、有無をいわず自分の子宮を引きずり出してしまうというエピソードが記されています。ジーマーマンさんは、これらふたつのエピソードを横切って、少女なるものが、子を生むからだとは別の独特に生産的なからだとして示されていると言います。自分のなかにひきこもり、幻想や記憶を紡ぎ出す力、書くことのエネルギーとしての少女ということです。この論文は、従って、女＝母というマスター・ナラティブに対して、この制度から逸脱した、異質な外部／他性として少女を対比させ、この少女という

焦点に、女性のサブヴァーシヴなテキストという特徴を読み出しているわけです。

マスター・ナラティブと作品のメッセージの関係の読み方として、上のふたつはフェミニズム的なアプローチとして模範的なものと言えそうですが、これらとはニュアンスの異なる読みもあります。谷崎や太宰の女ことばの使い方を議論した論文がふたつありますが、それらは、男の書き手の権力性一般というコンテキストと個々のテキストに現れた書き手の個性との関係を慎重に読み込んでいます。男が女手で書く、つまり男の書き手が、たおやめぶりを演じる場合には、常套的な読み方があるわけで、男の書き手は、女性性を抽象的に理想化して、結局男中心のジェンダーの政治をいわば裏口から強化すると解釈されていますし、近代日本の文化・政治的な文脈では西洋＝男、日本＝女というメタフォアとして読み、たおやめぶりの美化が、日本文化のナショナリズム的な理想化に結びつきがちだという理解もあります。上のふたつの論文はこういう常套に収めきれないテキストとして谷崎や太宰の作品を取り上げているのです。

第一の論文はコロンビア大のトミ・スズキさんのものですが、谷崎の1920—30年代に焦点をあてています。松子との出会い、関西移住、大阪のおんなことばに古い日本語の美を発見する、といった一連の展開があり、創作でも和文脈の女ことばを取り入れた、一連の関西もの——『葦刈』、『春琴抄』、『細雪』など——や『源氏物語』の現代語訳といった仕事があります。女ことばへの関心、伝統の再発見、時代のキャンノンだった私小説への反撥としてのものごたりを見直す、といった点の強調には、谷崎より一世代若いモダニストの作家たち——川端から堀辰雄、太宰にいたるグループ——と平行する関心が示されていますが、後者が日本ロマン派への結集という形で伝統主義の昂揚に向かい、反近代主義的なイデオロギーのなかに閉じていったのに対して、谷崎は思想的には意識的にあいまいな立場にとどまり続け、伝統的な美とともに近代西洋的な美に対する自身の好みをも手放さなかった。この不徹底さに、女手の使い手としての谷崎の独自性を確認しておくというのが論文の結論です。

もうひとつの論文は、ペンシルヴァニア大のリンダ・チャンスさんのものですが、戦後の太宰『斜陽』と谷崎『鍵』の女の語り手を論じたものです。たとえば『斜陽』の語り手かず子は、戦後の新しい女の、単純にポジティブな造型とはいいいがたい。その新しさは古い女性美を体現していた母へのこだわり、自殺した弟へのこだわりをかかえて、屈折した何ものかとして書かれている。また、『鍵』の妻にしても夫のマゾキスティクな計画からはみだして、最後には自分自身の欲望にめざめて自立したと言うべきかどうか。秘密の日記を盗み見るというテキストの方法は読者をも巻き込んで、ひとのこころの読み切れ無さをこそ開示し続けているのではないか。結局、太宰や谷崎の使う女ことばは、なによりも演劇的なもので、理想化された女性イメージに同一化し、女なるものを定義しなおすことより、男対女というジェンダーの二項対立そのものの不確かさを強制的に浮かび上がらせる仕掛けなのではないのか、というのがチャンスさんの結論になっています。

このふたつの論文は、従って、男が女のふりをして書けば、一律に常套的なジェンダーの政治が再強化されるとは言いきれないということ、個別のテキストが、それぞれに個性的なニュアンスをこめて、制度的なものとせめぎあう、そうした力学的な性格を実例に即して読み取ろうとしているわけです。

タフツ大のホセア・ヒラタさんには、川端の『眠れる美女』論がありますが、川端＝キャンノンという常套的な読み方を問いなおす読みの可能性が試みられています。フーコーの女ことばへの欲望をめぐる図式、つまり、シンボリックな意味にくりあがろうとする女ことばの使い方と、もの自体をリテラル（文字どおり）に写し取りたいという女ことばの欲望という対立の図式を使いながら、女ことばへの欲望のこの矛盾した二面が矛盾した緊張の持続として生きられている、開いたテキストとして作品を読み込んでいるのです。かなしくなつかしく、「美しい徒労」の世界を日本女性と日本文化の美の伝統としてアイロニカルに叙情するのが、川端のシンボリズムの世界だというのが、常套的な川端解釈、川端をキャンノンの典型として読み切ってしまう読み方でしょうが、この論文は、そういうシンボリックな読み方には収斂していかないエクリチュールのダイナミズムが挑発的に生きられているテキストとして川端作品を新しく読み込んでみせています。

以上、作品論の、特に、理論的な読み焦点をあて、それらのあいだにも、いろいろなニュアンスのちがいが読み取れることを申しあげました。以下では、作品の評価論と呼んでおいたアプローチを検討してみます。会議のテーマとして1997年に「ニュー・ヒストリシズムと日本文学研究」という特集、1999年に「キャンノンの形成をめぐる諸問題と日本文学研究」という特集をしました。これらのテーマには、現在の学会の関心的一端がよく現れています。

文学の評価をめぐる問題への関心、特に、それを歴史の問題とからめて読もうとする傾向が大きくなってきていると思われるのです。理論的にはこれらはひろい意味でのカルチュラル・スタディーズ的な読み方への関心と重なります。それと連動する方法上の現象として、ここ5年くらい特にめだつのが、作品そのものよりも、その書評とか読者の声とかを集めて、作品の評価をめぐる言説をそれ自体として検討するという読み方です。こういう読み方は、従来からある文献学的方法、作品の評価史を歴史的にたどって、その変化を整理する方法とも重なりつつ展開しています。

いくつかの例を御紹介します。1998年に日文研の稲賀繁美さんに基調講演をしていただきましたが、その講演は永沢光男の「AV女優」というベストセラーの書評を分析したものでした。インテリ・ジャーナリズムが、この本が示したセクシュアリティをめぐる言説の過激さにいかにショックを受け、それを消化しきれずに混乱したかを論じたものです。また、これも日本から参加したひとの論文ですが、志賀直哉がほぼ同時期に書いた「城の崎にて」と「和解」の、それらが書かれた当時に出された書評を比較した論究があります。「和解」は絶賛されたのに、「城の崎にて」はほとんど無視されたという極端な対比に注目し、「和解」が小説らしい小説として理解され、一方、「城の崎にて」は小説とは別のものとして受け止められた結果、無視されたのだらうと論者は結論し、両者が書かれた時代の小説＝文学概念を洗いなおす必要が説かれています。ジャンルと評価の問題は内田百間の評価を論じた論文でも話題にされています。百間が収録されているかどうかを主要な文学全集を比較して調べたりしながら、なぜ百間はマイナーな作家とされたのかを議論していますが、その主な活動が随筆で、小説ではないとされたためではないかと結論されています。

また、在日作家のブームについては、李恢成、李良枝、柳美里などの受け入れられ方が、70年代、80年代、90年代という、ミクロな歴史の政治・文化のコンテクストの違いと並行させて論じられています。同様の観点と手法から沖縄作家の受け入れの問題をあつかった論文もあります。1967年の大城立祐の芥川賞選評が『カクテル・パーティ』という作品の反米メッセージへの共感を強調し、作品の反本土というメッセージを半分意図的に読み落とす形で評価されたこと。その評価が、政治の季節の時代を反映していて、米軍基地反対運動から沖縄返還へ向かう政治情況に連動している点も指摘されています。1990年代後半に又吉英吉「豚の報い」と目取間俊「水滴」が芥川賞を受賞しますが、米軍兵士による十二歳の少女レイプ事件で揺れていた時代にもかかわらず、両者の評価は反政治化されていて、沖縄文化のエキゾチックな土俗性を評価するという力点に移っていることが強調されています。これらの論文における在日や沖縄作家のブームという現象の分析は、中心が周縁を取り込んで自己拡大する様子を批評的に読むことに力点があり、歴史の文脈をミクロに文節して観察することで、周縁を評価する権力の側の価値基準が恣意的に揺れる様子を浮き彫りにしてみせています。

作品の内在的な分析と、それが書かれた時代に結びついた評価の問題は重ね合わせて論じることが、原理上可能ですし、個人的には、そういう複合的な研究がもっと増えるといいと思っています。そういう視点をはらんだ論究もすでに若干現れています。以下では、そうした例に最後に触れておきます。古典では、『無名草子』を論じた、インディアナ大のイーデイス・サラさんの論文がそういう性質のものだと思います。『無名草子』は、ものがたりの作り手から女性が消えていく時代のはじまりにあって、女性の書いたものがたりであり、同時にものがたり論でもあります。作品そのものに複合的な視点が含まれているわけですが、論者の議論もそういう性質をみすえたものになっています。作品が、平安ものがたりの女性の書き手を熱心に絶賛しているにもかかわらず、その声は男が文学を独占していく歴史のうねりの中でかき消されてしまう。そういう流れを作者の意図に反して助長してしまった一因が、ものがたりを評価する作品の方法自体に潜んでいたのではないかという議論が展開されています。読み手を感動させる人物や場面に焦点をあてる方法は現在のリーダー・レスポンス理論などを先取りするような視点をもっているわけですが、それは、作者よりテキストに力点を置いたため、ものがたりと、その作り手が女性であることとのつながりの密接さを十分に強調できなくなってしまった。それは、女性をものがたりから消去していく時代に抵抗するメッセージとしてはむしろマイナスに働いたのだらうという結論になっています。

近代のものでは、ミシガン大の大学院生だったデイヴィッド・ローゼンフェルドさんに、芥川の「舞踏会」を分析した論文があります。芥川作品はピエール・ロティの「江戸の舞踏会」をもとにして、それを変形した作品として知られていますが、ロティの原作が、西洋優位な視点、日本人を見下す視点を示しているのに対して、芥川はそれにはっきり反論せず、叙情的、審美的な読み返しに留まったといった評価が従来の定説になっていたとした上で、ローゼ

ンフェルドさんは芥川の表現に、屈折しているが、明確な抵抗のメッセージを読み出しています。芥川の視点の屈折には、鹿鳴館の時代と作品が書かれた大正時代との政治社会上の変化が強調されます。鹿鳴館の時代が西洋の植民地主義者とその犠牲としての日本人という図式に単純に収まっていたとすると、作品の書かれた時代は第一次大戦後の時代、日本が台湾占領など積極的に植民地主義者へと変貌しはじめていた時代で、作品の屈折には、西洋と植民地主義に対する日本の立場の両義性が反映されつつ、その上でロテイの立場への批判がなされているという議論になっています。コンニチワ嬢だったか何だか名前は忘れてしまったが、印象的だったある美少女として、ロテイが描いた女性とのエピソードに、芥川は集中し、この相方の女性の立場からふたりの出会いを書き直しています。ロテイは、相手に強くひかれたことをほめかす一方で、その出会いの鮮烈さを、結局名も知れぬ東洋の少女との一場の逸話へと矮小化して終わっているわけですが、芥川は、その出会いの強度を固有名詞の問題として浮き上がらせます。その点は、この少女を秋子という固有名をもつ主人公として設定することで最初から暗示されますが、特に、最後で、「ああ、あなたが踊った相手はロテイだったのですね」という語り手に対して、「いいえ、ジュリアン・ヴィオというひとでした」と秋子がくり返す部分に最も批評的な形で強調されるのです。三度も一緒に踊り、バルコニーで語らいもした、少女との思い出の特別な質を、ロテイは、オリエンタリズムをいわば隠れみのにしてはぐらかし、相手との出会いに距離を置いてみせていますが、芥川はふたりの出会いのできごと性を、個と個がむきだしで向き合った経験の鮮烈さという角度から書き直すことで、ロテイの書き方への抵抗を示しているとローゼンフェルドさんは読んでいます。自分が踊ったのはロテイではなく、ヴィオという生身の男だったという秋子の主張をとおして、ロテイへのアイロニカルな批判は極まるわけです。オリエンタリズム的なものが、異文化を背負った他者を消去し、自文化中心主義のなかにうずくまる典型的な方法だとすると、個と個の出会いの感動を直視するという道筋が、こうした閉じこもりを破る可能性になるという積極的なメッセージを芥川作品は内包してもいます。ローゼンフェルドさんの論文は、インターテクチュアルな読みと作品の書かれた歴史の文脈を複合した視点から議論を展開し、芥川の小品に内在している大きなテーマを掘り出していると言えます。

以上、いろいろな研究の一端を御紹介しました。われわれはまだ若い学会で、課題も多いと思われませんが、今後とも、より緻密かつ大胆な読みの試みを支援し続けていきたいと考えています。その点とも重なりますが、今後、ますます日本の研究者との交流を深めていきたいと希望しております。その意味でも、今回よい機会を与えられましたことを、最後にあらためて感謝申し上げます。

註

(註1) 日本からの会員、学会発表者を募っています。また、論集のバックナンバー購入も可能です。興味をお持ちの方は、以下に御連絡ください。

AJLS, Purdue University, 1359 Stanley Coulter Hall, West Lafayette, IN47907, USA;

E-メール: esekine@purdue.com

(註2) 現在までの学会のテーマを列挙しておきます(括弧内は主催大学名と主催年度)。御参照ください。「日本文学の詩学」(パデュー大、1992)、「ものがたりの欲望」(パデュー大、1993)、「日本の演劇とパフォーマンス」(パデュー大、1994)、「リヴィジョニズムと日本文学研究」(ウィスコンシン大、1995)、「雅と俗のダイナミックス」(インディアナ大、1996)、「ニュー・ヒストリシズムと日本文学研究」(ミシガン大、1997)、「日本文学の愛とセクシュアリティ」(パデュー大、1998)、「キャンノン形成をめぐる諸問題と日本文学研究」(コロラド大、1999)、「書くという行為」(ワシントン大―セント・ルイス、2000)、「外からの日本」(タフツ大、2001)、「うたとものがたり再訪」(パデュー大、2002)。